

## 社会科の授業を対人援助学の視点から⑤

2024年2月22日 内田一樹

### 1. 2年目を終える

そもそもこのマガジンに投稿するきっかけとなった、選択講座「東北と復興」。2年目が終わろうとしている。今年は、昨年度よりも関わる人やフィールドワークで行く場所が増え、それだけたくさんの方のことを生徒達と考えることができた。

合わせて、この選択講座「東北と復興」についても様々な研修会の場で報告をさせていただいた。民間の授業サークルや教育団体、学校の公開教育研究会等である。生徒達に報告してもらうだけではなく、私自身が授業カリキュラムや授業内容について様々な場所で意見をいただくことができた。それらの体験を通して、より自分自身の中でも思っただけではなくそこに言葉がついていくようになってきたように感じている。

昨日、学校の各教室に「防災マニュアル」をつくって配布した。これは昨年「東北と復興」を受講した生徒の声、学校の避難訓練をもっと他人事ではなく自分事として学校全体で考えたいという意見からはじまった。私を含め数名の教員と(今年度から校務分掌で防災の担当にもなった)、中高の全校生徒の中から有志を募り、週に1回集まって話してきたことの一つの集大成である。生徒と教員を合わせて毎回10名弱の集まりは「防災を考える会」として、学校の防災における生徒が感じている様々な課題が出された。避難訓練におけるみんなの態度や避難経路に対する疑問、生徒だけではなくて教員の側の意識も低いということも意見として出された。そしてそれらの課題を解決していくためにみんなで考えた結果、最終的には「防災マニュアル」をつくって各教室に置こうということになった。もちろんすでに学校には生徒、教員用の防災マニュアルはあるのだが、それをさらにアップデートして作成された。もちろん生徒達もマニュアルで全てが解決するとは考えていないが、しかし以前よりも防災について考えてくれる人が増えてくれるのではないかと期待し、形にできたことを嬉しく感じているようだ。

これは学校にある身近な問題を生徒達自身が変えていこうとする第一歩であると思っっている。しかし昨年、こうした生徒達発信の動きを研修会で報告したとき「学校の避難訓練を作るのがゴール?」「防災だけを考える講座なの?」といった反応が多かった。これは防災を考えることだけが本質ではなくて、生徒達が自分達の周りの問題を自分達で変えていこうとすること、そしてその思いを実際に自分達が主体となって一つの動きとして形にすることができたという実感が大切である。しかしそのことを私が伝えきれなかったのか、「防災」という言葉が持つ力が大きすぎたのか。

実際、昨年「東北と復興」について報告する中で感じたことは、この講座は何を目指しているのかということが伝えきれなかったということである。それだけ「東日本大震災」、あるいは「震災からの復興」という言葉を受けて感じることは様々あるということだと思っ思う。防災、巨大堤防、原子力発電所、伝承、政治……。そしてそれは東北ではない地域で多く感じた。特に社会科として「東北」を「教材」として、上述したキーワードについての一定の社会認識を身につけさせるべきだと感じている人(社会科教員)が多いように感じている。この感覚が個人的には不思議に思ってしまった。それがまだ私が伝え切れていない部分だったのかな、言葉にできていない部分だったのかなと

思う。私は「東北」を「教材」にして教えることはできない。なぜなら私も何も分かっていないからだ。「分からない」からこそ「東北」へ行く。同じような事に興味関心を持っている高校生達とともに「考える」。もちろん教員としてツアーやどこに行くか、誰と会うか等は用意する。それはどちらかという環境を整備しているイメージに近い。高校生達と同じ地平で、一緒に受け止めて考え合う。この講座の目的は声に耳を傾けて、それに対して応答していく営みを積み重ねることである。これは過程であり、ゴールでもある。この営みは、これからの市民社会を生きる市民としての資質を養うことに繋がると思っている。社会構造を説明できること、政治を論じることだけが、市民の資質ではないはずである。誰かの声に耳を傾けて自分に出来る事をしていく対人援助も市民としての資質であると思う。専門職としての職能だけではなく、市民社会における資質としての対人援助。それは声を聴いて自分にできることをしていく共助かもしれないし、公助を求めて声を上げていたり、大きな問題に対してみんなで社会を動かすための運動をしていたりすることかもしれない。

## 2. 高大連携シンポジウム

2月11日に東京大学で「学校インターンシップの可能性」と題して、シンポジウムが行われた。私の勤務校は東京大学と高大連携 協定を結んでおり、その仕組みを利用して選択講座「東北と復興」においても、大学生・院生に伴走をしてもらっている。昨年度は5名、今年度は2名に関わってもらっていた。今回のシンポジウムはその報告会を中心に行われた。それぞれ新鮮な発見がある報告会であった。

「東北と復興」の授業においては、今年度伴走をしてくれた大学生から高校生達とかかわったことで自分自身にとってどのような意味があったのかが語られた。福島県出身のその大学生からは、高校生との学び、ともにかかわって話す中で、自分自身の「『当事者』としての立場が複雑さへのフタになっていた。」と振り返っており、その言葉が大変印象に残った。自分自身も東京へ出てくる中で「当事者」として外部から見られることが、かえって東日本大震災に関わる様々なことについて考えたり、口にするのを難しくしていたりしていたことに気付いたということであった。そしてそれらは講座を通して答えの出ていない問いに対して高校生達が学び、考え続ける姿勢を通して得られたものだったようだ。その大学生自身の物語に高校生との関わりが新たな意味づけを与えたことを知った。実際、この講座を受講している生徒の中には当事者性が高い人たちも一定数いるため、そのことも影響しているのかもしれない。

シンポジウムの最後には東京大学院教育学研究科の小玉重夫教授が指定討論で話されており、その中で高大連携の可能性の一つとして「中高生が大学生の教員養成に関わる」ということが語られていた。実際に教員になりたい人が高大連携で高校に来て、高校生と関わる。そのことによって大学生自身が自らの物語に新たな意味づけを加えたり、大学生が教員になるというプロセスに高校生が影響を与えたりするというのもつ意義を感じた。ただし、それらは今後も継続していく中で



シンポジウム  
学校インターンシップ  
の可能性  
高校生の探究的学習における  
大学生の支援を中心に  
2/11日  
13:00～16:00  
東京大学 本郷キャンパス  
福武ホール・ラーニングシアター  
※参加無料 オンライン配信も行います  
主催 東京大学大学院教育学研究科・教育学部  
共催 自らの高等学校・高等学校  
東京大学教育学部附属中等教育学校  
お申し込み  
お問い合わせ  
QRコード  
を  
読み  
取り  
ください  
toshi-a@g.eccu.tokyo.ac.jp

さらに実質をつくっていくものかもしれない。私自身大学院生の時に対人援助実習として高大連携に関わっていたからこそ、余計にそう感じている。

### 3. 来年度に向けて

今度の3月には宮城県仙台市にあるせんだいメディアテークの3がつ11にちをわすれないためにセンター(通称、わすれん!)の企画展「星空と路」に、この講座として出展をさせてもらうことが決まっている。これは今年度スタディツアーに参加した生徒が、ツアー後もわすれん!の担当者の方達とやりとりを続けていて決まったことである。(詳細は、<https://recorder311.smt.jp/information/66310/>)

自分達自身の学び、考えてきたことを改めて東北の方達にお返しする応答の一つの形だと私は感じている。講座が3年目を迎えるにあたってより関係性が密になってきているように感じている。

3年目となる来年度は、カリキュラムの内容を改めて考えなおしたい。昨年ある場所で報告した際に、講座の内容が社会認識をつくるようなものになってきている、と指摘された。それは1年目に比べて2年目をポジティブに評価した文脈ではあったが、一方で対人援助学を志す高校生にタネを植えるような講座を目指す中でそれで良いのかという疑問はある。しかしそのタネはまだ私自身の中で鮮明な輪郭を描けていない、あるいは言葉を持ち得ていない、あるいは見つけていない。3年目となる来年度はそのことを意識してカリキュラムを編成してみようと考えている。